
[SilverRing]

詩斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「Silver Ring」

【Nコード】

N3384A

【作者名】

詩斗

【あらすじ】

今よりずっとずっと昔、悪魔がこの世に存在していたころのこと。人間は、自分たちに害をもたらす悪魔をそれはそれは毛嫌いしていました。なんとかできないものかと人間は研究を続け、ついには悪魔を捕獲する方法を生み出したのです。悪魔はどんどんと捕獲され、世界は人間の手に治められることとなりました。そうしてその後、これまでの復讐なのか、人間は悪魔を、奴隷として扱うようになっていったのです。これは、そんな時代に生きた、ある少女のお話。現在連載停止中です。「You and I」の連載が終了す

れば連載再開します。

prologue (前書き)

「Silver Ring」は、驪々さんから頂いたアイデアをもとに、詩斗が執筆している小説です。

prologue

その日は、なにかも全てを覆い隠してしまうほど世界が暗かった。

太陽の光は幾重にも重なった雲に遮られ、その雲ですらその瞼に涙をため、堪えきれずに涙を流しはじめるのはもう時間の問題だろう。

今日の天気は、さながら自分の今の気持ちを表しているようだ、と少女は思った。絶望に支配され、自分ができることはすでになにもない。今は時が来るのを待つばかりというわけだ。

大声で泣こうが、声が枯れるほど喚こうが、誰も少女を救ってなどくれない。ただ、横目で少女を見遣り、ひそりひそりと言葉を交わすだけ。そんな大人に、少女は期待などしていなかった。そんなもの、彼らにするだけ無駄なのだ。

自分にできることはなにもない。けれど少女は、ひたすらに祈ることをとめられなかった。

ああ、神様。どこにいますか。お願いします。私の願いを、聞いてください。私の生涯で、たった1つのお願いです。

そのまま一心に祈り続けてどれほどの時間が経ったのだろうか。ふいに背後から少女を呼ぶ声がした。身体を大きく震わせて、それでも冷静さを保ち、声の聞こえた方向に振り向くと、そこには褐色の肌を持つみすばらしい身なりの少年が1人立っていた。

年のころは少女と同じか、それより下か。辛うじて上下の服を着用してはいるものの、ところどころにほつれのある、そんな姿。服装に頓着しないところからみて、彼はきつと内輪向きに雇われているのだろう。

貴族とその使用人という関係にある彼らに、服装以外の差異は大してないが、たった1つ。誰からもわかる決定的な違いがあった。それは少年の額に施された、血を連想させる赤黒い烙印。かたどら

れた模様は、古代語で「悪」を意味すると母親から教わった。

人間はこの烙印で彼ら本来の力を制御し、思うが儘に使役しているのだ。力を制御されたままでは反抗することも叶わない。彼らの額から烙印が拭われない限り、烙印を施した者に、永遠にかしずかねばならないのである。

少女は、当たり前のように普及しているこの制度を、心底嫌悪していた。

——シエル様、ご主人様がお呼びです。

今、一番会いたくない人間に呼ばれることの不愉快さ。それを一生懸命小さな身体に押し隠し、誰もが魅了されると評された笑顔を浮かべて少女は屋敷へと戻っていった。その後ろから、ひっそりとその少年も続く。

微笑を顔に貼り付けたまますべるように歩く。そうして、視界いつぱいに屋敷が映りこんだ頃、ようやく少女は立ち止まった。目の前には金銀の繊細な細工を施され、いかなる階級だろうとも確実に目を奪われるであろう豪勢に彩られたドアがあった。

少女の力では動かすことなどかなわないほど大きく重厚なドアを、声をかけてきた少年とドアの傍に立ち尽くしていた門番2人とが協同して押し開く。この2人の額にも、やはり烙印は押されていた。見事なまでの笑顔を張り付かせた少女の顔に緊張が走ったのは、ようやくとドアが開かれ、その中に一步を踏み出そうとした矢先のことだった。

少女の眼前には、しつかりとした体格を持ち、彼曰く「使用人」

——といえば聞こえはいいが、結局のところは奴隷である——に毎晩磨かせていることが容易に知れるほどつややかに光る10の爪を持つ、1人の紳士がいた。少女は緊張をなんとか押し隠し、さらに笑みを深めて軽く会釈をした。

「ここにいらしたんですね、お父様。私をお呼びだと伺いました
が」

「シエル、さきほどからお前を捜していたんだ。また外の礼拝堂へ

行っていたのだな」

「ええ。お母様が少しでも良くなりますように、と。どうかなさったんですか？」

「シエナがお前を呼んでいる。最期が近いのではないかな」

笑って妻の死を娘に宣告できるような男だ。きっとこの男は他人のために流す涙や優しい心など、ひとかけらも持たないのだろう。とうの昔に気付いていたはずなのに、今回ばかりはこの、どこか楽しそうな気配を含んだ、そんな一言を聞き流すことができなかった。「何故、何故お父様はこんな時にまで笑っていられますの……?!」「何故? そんなことわかりきっているだろう。別に悲しくなどないからだ」

大きな声を響かせて笑う父親に、少女は返す口を持たなかった。開いた口が塞がらないとはこのことをいうのだろうか。確かに両親の仲が冷え切っているのは、少女をはじめとしたこの屋敷に住まうほぼ全ての者が理解していたことではある。

しかし、だからといって、娘の目前でそれを暴露する父親はどこにしよう。この男には、人間として大切なものが欠けているとしか思えない。

「……失礼します」

なおも笑い続ける父親の隣をすり抜け、エントランスの階段を駆け足でのぼる。三度ほど繰り返し、その屋敷の最上階、そして一番奥に位置づけられている部屋に駆け込んだ。ドアに手をかけたまま、少女の目はベッドへ、ベッドの上に横たわるやせ細った母親へと釘付けになった。

自分の目には、母親はただ安らかに眠っているかのようにみえる。そんなことはありえないのだけれど、わかっているけれど、そうであればいいと願った。

こんなに遠くからでは胸が上下しているのかどうかなんてわからない。それまでの嫌悪と摩り替わっていく恐怖心を押さえつけ、少女は一步、また一步とベッドへ近づく。

傍へと辿りついた頃、かすかに胸が上下しているのを感じて少女は小さく安堵のため息をこぼす。かすかな音ではあったがそれで充分だったようで、母親はゆっくりと瞳を開いた。

侍女たちのすすり泣く声を背に、少女は部屋を走り出た。廊下の先、階段の手すりに背を凭れかけて口元に正気でない笑みを浮かべた父親が立っていたが、精一杯平気なフリをしてその前を通り過ぎていった。

わき目も降らずに階段を駆け下り、目の前に迫った豪華なドアをすり抜ける。そして外に建てられた礼拝堂に駆け込むと、少女は隠すように身につけたネックレスの、その先につるされた指輪をしつかりと握り締める。瞳からは、次から次へと涙が溢れだしていた。

貴女を1人ぼっちにして、ごめんね

それが、少女が唯一大切に感じていた人がくれた、最期の言葉だった。

これでもう、少女を守ってくれる壁はない。これからは全てを自分で考え、行動しなければならぬ。こんなところで泣いている暇はない。

強く、もっともつと強くなる必要がある。きっと、さきほど父親に逆らったことで、大きな代償を負うことになるから。そして、母親の願いを、今度は自分が受け継ぐ番だ。

我慢しようと思えば思うほど、涙は溢れて止まらない。1人の人間が死んだからといって、どうせこんな外の礼拝堂にまで祈りに来る者なんていやしないのだ。考えがそこにたどり着くと、少女は我慢することを放棄した。

少女の泣き声が礼拝堂から洩れ聞こえてくると、呼応するかのよう
に空からも雨の粒が流れ出し、それは瞬く間に豪雨となる。まるで
礼拝堂とその中で泣き伏す少女を守るかのように、長く長く、降り
続けたのだった。

01・悪夢の果てに

遠くから、誰かが私を呼ぶ声がする。

「…………え、ま…………えさま、姉様、シエル姉様！」

「んん…………ラグ、ド？ どうした、の」

「起きましたか、シエル姉様？ 全く、当家の長子ともあるうお方が、中庭なんかでのんびり昼寝なさらないで下さい。当家の品格に関わりますから。ほら、立って。さきほどから父上が貴女を呼んでいます」

私は寝起きでまだまだぼんやりとした頭を抱えながら、大人しくラグドの差し出してくれた腕に捕まり立ち上がった。瞬間、軽く眩暈がしたが、なんとかふらつくことを堪える。

何故だろう、とても気分が重い。夢見が悪かったせいだろうか？
どんな夢かまでいつもどおり詳細には覚えてないけれど、なかとても後味の悪い夢だった気がする。

胸の中がもやもやして、すっきりしない。すっきりしないけれど、仕方のないことだ。きつといつもの夢だろう。お母様が亡くなつてから、頻繁に見るようになった、夢。

夢の内容は、起きても思い出せないけれど、いつだって気分が重くなる。こんな夢みなければよいと思うのだけれど、こればかりは自分の意思でどうとでも出来るものではないから。

ラグドに気付かれない様、私は目元に溜まった涙を拭い去った。

この屋敷には、私の味方はいない。だから、誰にも弱みを見せてはいけないのだ。

ラグドは、お父様と、お母様が亡くなって半月もたたぬうちにお父様が連れてきたマーシャ様との間に生まれた子だ。マーシャ様もお父様も、私や私のお母様のことをよく思っていないから、そんな2人に育てられたこのラグドだって私のことをよく思っていない。話をするときはいつだって嫌味な口調。だけど、ここまであからさまなのは逆にすつきりしていて、いい。最近、私を悩ませるのは世間体を憚ってか表面的には優しい、しかし裏ではなにをしでかすか想像もし得ない、お父様とマーシャ様のことなのだ。

別に私はこんな家の家督などいらないうのに、世間一般に受け入れられているのは長子相続。私さえいなければ全てがうまくいくのに、とんやかやと嫌がらせを受けることが多い。

年々陰険になってくる嫌がらせを回避するすべに悩み、悩みぬいた結果が、必要時以外を屋敷外で過ごす、ということなのに、外にまで追ってくるのだから。放っておいてくれれば私だってなにもしないのに。

大人しく、ラグドの差し出した腕につかまって2人で屋敷に戻り始めた。こうして外から眺めているだけでも、この屋敷には、なにか気持ちの悪い空気が立ち込めているような気がする。

できればあの中に入りたくないのだけれど、ラグドにつかまっているからそれも無理な話だ。

「わざわざ呼びに来てくれたのね、ありがとうラグド。それで、私はどこに行けばよいのかしら？」

「ご自分の私室に。父上は、手が離せないから後で部屋に話をしに行く、と。次期当主ともあるう者が中庭に出て昼寝するなど言語道断、と言ってらっしゃいましたから、その件についてじゃないですか？」

「そう。でも外でゆっくりするのも気持ちがいいものよ。ラグド、外で昼寝をした経験は？」

「ありませんよ、貴女ではあるまいし。僕は貴女と違って、勉学に励むので精一杯です」

わざとらしくため息をつきながらラグドはいう。勉強に励むとはいえもとが悪いのか、一向に私を追い抜く気配は見せない。そのことがまたお父様やマーシャ様を刺激しているのだろう。

ラグドが誰にもわかるほどの秀才であれば、次期当主は私でなくラグドに交代できたのに、と。そうすれば、あの方々の大好きな世間体も守られるから。

屋敷内までラグドにエスコートされ、不本意ながら私室へと向かう。嫌味をいうためにお父様がこの部屋へと訪れるなんて珍しいこともあるものだ。こんな珍しさならばありがたくもなんともないのだけれど、仕方がない。

屋敷の最上階、一番奥に位置する部屋。かつてお母様が使用していて、今は自分のものとなった部屋に滑り込むと、私は紅茶の準備をしようと部屋の左側にある小さなキッチンに向かった。

この部屋は、段々と衰弱し、最後にはベッドから動くこともできなくなったお母様のために改造された。お母様が望めばすぐに紅茶をいれられるように、お母様が望めばすぐに暖かいものが食べれるように、水道や小さなコンロに冷蔵庫のある簡易キッチンが設置されたのだ。

けど実際は、当時すでにマーシャ様と関係していたお父様にとって、厄介者になったお母様を極力部屋から出さないようにするために、この部屋だけで全ての用の足りるようにされたのだ。

こうした改造も、今の私にとってはありがたい。出来る限り部屋の外に行かずにすむから。

茶葉を選び、湯を沸かす。ティーカップを2つ取り出して、部屋の真ん中あたりにある小さなテーブルに並べた。

ちょうど茶葉が蒸されたなと思った頃にドアをノックする音がする。あまりのタイミングに、持っていたティーポットを落としかけたけれどなんとか堪えた。ティーポットをテーブルに置き、ドアを開ける。

そこにはもちろんお父様が、後ろに1人の“使用人”を引きつれ、

表面上にこやかに立っていた。使用人を連れてくるなんて、お父様は本当になにをしにここに來たのだろうか。

「やあシエル。相変わらず外で昼寝をしているそうだね。この時期、外は気持ちがいいのかな」

「ええ、とつても。どうぞお入りください」

一応形式だけの言葉をかけ、2人に部屋に入ってもらう。まさか使用人を連れてくるなんて思ってもみなかったから、彼の分の準備をしていなかった。もう一度紅茶を入れなおそうとした時に、当然の如くティーセットが準備されているテーブルに陣取るお父様と、その背後に控える彼をみた。

こういう構図には心当たりがあった。過去に1度、お母様が生きていた時にみたことがある。これは、きっと心理戦だ。

私は、この屋敷内では自他共に認めるほどアウトローな人間だ。

この世の使用人制度に異議を唱える無法者。自分のことくらい自分ですればいい、と、毎晩使用人に爪を丹念に磨かせるお父様に進言したこともあるほどだ。

そんなところをお母様から受け継ぎ、そのためにお母様は殺されたのだけれど。お父様は、こうして使用人である彼を使うところを私に見せて、私になにを言おうとも、今まで受け継がれてきたものは変わらない変えられないとも言いたいのか。

別に構わない。そちらがその気ならば、こちらも自分なりの対応をするまでだ。

「そちらの方も、こちらの椅子に座っていただけますか？ いま紅茶の準備をいたします」

お父様を無視する形で、お父様の後ろに控える使用人の彼に声をかける。案の定、お父様も当人である彼も目を見開き、しばらくの間は開いた口が塞がらないようだ。この程度の反発で驚くだなんて、お父様も随分と甘いこと。

彼らの呆けている間に私は再度紅茶の準備をし、ティーカップをもう1脚、テーブルに準備する。

上品な香りとはのかな湯気の立つ紅茶の入ったティーカップが準備できた頃、ようやくと2人は意識が戻ってきたようだった。3つめの椅子を部屋の端から持つてきて座る。そんな私を追う視線が2組。1つは恨みがましい、もう1つは驚きに満ち満ちて、ということころだろうか。

「シエル。これは使用人だ。使用人が主人と同じテーブルにつくなどあつてはならんことだ。わかるね」

「だけとお父様。私は自分が座っているのに誰かが立っているなんて我慢がなりません。だからこの部屋には誰もいないでしょう？私と話がしたいと仰るのであれば、そちらの彼も座っていたかなくてはいいませんわね」

にこやかに、しかし強気で一気に喋る。今までもいろんなところでこういうことがあった。私に見せ付けるかのように、お父様は私の前で使用人達をこき使う。その度に私はお父様に刃向かい、お父様はなし崩しで受け入れざるを得ない。それだけの力を身につけた。今回もそうなるかと確信しつつ、お父様と視線を交える。数十秒の攻防の末、諦めたかのようにお父様が大きな大きなため息をついて後ろに立つ彼に合図を送った。それでもまだ彼は動かなかったけれど、「座れ」とお父様が声をかけると、恐る恐るといった感じで椅子に座った。

「こちらがミルクで、こちらが砂糖です。好きにお使いくださいね」

と、いまだ目を丸くしている彼に話しかけ、自分の分にミルクを注ぎいれてから本題に入る。

「お父様がこの部屋まで来られるなんてとても珍しいことですわ。なにか緊急の用でも？」

苦々しい表情をしながら紅茶をすするお父様に、さりげなく探りを入れる。お父様は、苦々しい表情にさらに不機嫌さを交えつつ、ティーカップを傾けながら答えた。

「いや、今日は仕事が少なくて時間があるし、久々にシエルと話で

もしようかと思つてね」

「あら。お氣遣いどうもありがとう。それで、なにがあつたのかしら」

時間稼ぎをするかのようにこちらの機嫌をとつてくるお父様、意味がないことはしなくてもいいのに。いつだって無駄な前置きを必要とするのはあちら側で、私の方は特に必要としない。要件だけ言つてくれれば、きっと互いにすつきりした気持ちで話し合うことができるはず。

嫌悪感を隠もしない私の態度に、お父様との間に挟まれている彼は居心地が悪そうだ。みれば全く紅茶に手をつけていないから、もう一度勧めようとした時に、今度はお父様が攻撃に出た。

「実はな、シエル。お前も今年で18。そろそろ婚約者の1人でも決めなければおかしい年だろう。そこでだ、この屋敷に通う者たちの中で、お前の眼に適う人間はいたかを聞きに来た」

確かに、いつかは来る質問だと思つてはいたけれど、突然だったからしばらく思考が停止したままで。だけどいつまでもこのままじやいけないとなんとか思考を回復させて、笑顔を作った。口元が引き攣れてるって、わかる。

「——いいえ。ピンとくる人がいなくて。もう少し考えさせていただけるかしら」

「仕方がないな。それならば、この度の縁談を進めさせてもらうよ」

縁談。いま、嫌な言葉を聞いた。空耳だとよかった。けれどこれは、どこまでも性質の悪い本音のようだった。

「縁談、ですか」

「そうだ。ロード・ヴィガント、当年28の働き盛りだ。我らより少し位は落ちるが、それでも世間からみれば高いほうだし、あの土地は弟に継がせて、彼自身がこの家に来てくれるそうだ。よかったな」

お父様と使用人の彼が帰ってしばらくたってからも、私は動けなかった。なによりも世間体を大事に考えるお父様があそこまで具体的に話すということは、もう今回の縁談は結構なところまで進んでいるようだ。結構なところというどころか、ほぼ本決まりといったもいい。

帰る際、使用人の彼から気の毒そうな視線を送られて、それが、嫌でもこれが現実なんだという感覚を与えてくれた。

私はこんな家を継ぎたくない。頃合を見計らってこの家から出るつもりだったのに、そろそろ時間切れのようだ。この家を出るうまい方法も考え付かないし、今度こそ本当に、この家に縛られてしまう。

いくらお母様の意思を継ぐべく力を身につけたとはいえ、それはこの屋敷内に限ったこと。ひとたび外に出れば、爵位なんて名ばかりの小娘の末路なんて知れている。もう少し時間が稼げると思っていたのに、どうすればいいのだろうか。

手を組んで、胸元に押し付ける。こんな時、お母様ならどうするだろう。

「……ねえ、お母様？ どうすれば、こんな世界から抜け出せるかな……」

1人には大きすぎるこの部屋に、私の小さな声だけが響いた。

02・表の顔 裏の顔

縁談の話をお父様から聞いて、完全に頭が働かなくなった。なんとかしなきゃとは思っけれど、頭は動かないし、何も考えられなくて。けれど部屋にこもっていたからといって全てが解決するはずもない。

だから、気分転換をしようと思った。鬱々とした気分を晴らすことができて、かつ1人でゆっくり考えることができる場所。今の私にとって、その場所は間違いなく、庭先に建てられている小さな礼拝堂だ。けれど、行けない。

お父様は私が逃げるとでも思ったのか、部屋から出て行ったあとすぐドアの周りを使用人で固めた。ドアから顔でも出そうものならばすぐ、彼らに「どこへ」と質問される。

もちろん必要最低限は認められるけれど、その他の場合は認められず、部屋の中に2人がかりで押し戻されるのだ。お父様からの命令だから、もちろん仕方のないことではある。けれど、少しでも鬱陶しいと思っているのも事実だ。

こんな状況下、易々と屋敷をでて礼拝堂にこもるなんて芸当できるのだろうか。私の一挙一動、全てをお父様はドア許で見張っている彼らから報告させているはずだ。私が屋敷を一步でもできることを良しとしないお父様のことだから、部屋を抜け出たと報告を受けたら即刻私を屋敷に、部屋に、連れ戻そうとするだろう。

だから私は、どうやって彼らを欺こうか考えていた、のだけれど、頭が働かないから名案なんて全く思い浮かばないし、それ以前に、私を外に出したとあれば、多分彼らがお父様から罰を受ける。いくら外に出たいからとはいえ、彼らに罰を受けさせてまで行きたいとは思えなかった。

「どうしよう、かなあ」

後にも先に完全に煮詰まってしまった。ならばもうどうにでもな

つてしまえ、という気分になり、気分の冷めないうちにとひっそりドアを開けてみる。薄くドアを開け、外にいる彼らが今どういう状況にあるのかを確認しようとした。

「……ん？ あれ？」

正直な感想を声で発すると同時に、ドアを大きく開ける。そこには誰もいない。本当に、右を向いても左を向いても、誰もいないのだ。1時間ほど前にドアを開けたときは確かに2人はそこにいて、なんなんだろうと首を傾げる。

ふと廊下に整然と並んでいる窓から外を覗き込んでみた。外は真つ暗、闇の世界だ。もしかすると、と時計をみると、確かに針は深夜を少し過ぎていた。屋敷内は、昼間と打って変わって物音1つせず、静まり返っている。

つまりはこういうことだ。夜になったから、私はきつと寝たものだと考え、お父様が2人を呼び戻したのだろう。明かりをつけなかったことも幸いしたらしい。悩んだ自分が馬鹿みただった。これで、屋敷を抜け出せる。礼拝堂に行つて、これからのことを考えよう。

ゆつくりと、音を立てないようにドアを閉める。廊下にはふわふわとした敷物がひいてあつて、おかげで音の大部分は消されるけれど、万全を期して靴を脱ぎ、裸足のままゆつくりと廊下を横切る。敷物の感触は、ふわりふわりといつも以上に気持ちのよいものだった。

けれど、気を抜くわけにはいかない。名残惜しいけれど、この感触をゆつくりと楽しむのは、また今度にしておこう。

権力を誇示するかのように豪華絢爛に建てられた屋敷、広い広い敷地。けれど庭先には、こんなところには似合わないほど質素でこじんまりとした礼拝堂が建てられている。これはお父様の望んだものではなく、お母様が嫁いすぐに望んで建てられたものらしい。全てにおいて自らの地位に相応するものを望むお父様に比べ、こ

の礼拝堂にはお母様の人格が現れている。人にかしずかれることを嫌って部屋にこもりがちだった、大好きなものに囲まれて静かに生きることを願ったお母様。礼拝堂は私にとって、権力に支配される世界よりも何倍も何十倍も過ごしやすいところだ。

ドレスの下に隠していたネックレスをひっぱりだし、その先に鈍く光る指輪をそつと握り締める。

礼拝堂に祀られているのが誰かなんて、私は知らない。知らなくていい。ただ、ここが一番、お母様に近いと感じる場所だった。お母様が亡くなってから、見守ってくれる人もいない、友達もいない、そんな私は孤立した。

もともと使用人制度に異議を唱えていたのはお母様だった。使用人と称した人身売買、この屋敷ではそこまで悪くないかもしれないけれど、市井の場では奴隷として扱われている悪魔という種族。いくら大昔に害を被っていたからといえ、何の権限ももたない現在の待遇は酷すぎる。

せめて彼らにも正当な権利を、この世界で生きていくための権利を与えるべきだ、と主張し続けた結果が、お母様の死だった。

今までお母様が身を挺して守ってくれていた。亡くなったあとの私への対応は、表面上爵位を持つ者へのそれだったけれど、裏では嫌がらせが頻発した。お母様が亡くなってからの10年間。小さな頃は陰湿な嫌がらせに耐え切れず、いつもこの礼拝堂で泣いていた。時が経つにつれてそうした嫌がらせに耐性ができ、今では反論することも可能だ。もちろんそのためだけに死に物狂いで努力し、知識や話術を身につけた。けれど、身を守るためにつけた力も、所詮はこの屋敷でしか通用しないのだ。

この屋敷を出れば、ただの小娘。屋敷を飛び出して生きていくための力を、私はまだ蓄えられていない。自分の今後の身の振り方を考えた時は、いつだって心細くなる。そんな時は必ずこの礼拝堂に来た。

お母様の意思が残っているかのように、ここでは暖かいなにかに

包まれて気は晴れた。いつだって、難問にぶち当たってもここに來るといい解決法が浮かんできたのだ。けれど今回は違ふ。いくら考えても、どれだけ考えても、いい解決法は浮かばない。半ば泣きそうになりながら、それでも悩み続ける。

世間体を気にしすぎるほど気にするお父様が、私自身に縁談について伝えてくるということは、この縁談はかなりのところまで進んでいるはずだ。つまり、相手の男——ロード・ヴィガントだったか、その彼も乗り気ではいるはずだ。

伝え聞く噂によると変人で、使用人制度反対を唱えるアウトロー。けれど、それと天秤にかけても、この屋敷の次期当主近くに侍れるほうが何倍も得なわけだ。ここで私が断ったとしても、そこまで進んでいる縁談を断るだなんて不名誉なことをお父様がするはずがなく、氣付いたときにはすでに結婚の準備は整っていたなんてことになりかねない。

爵位を返上して市井に降りるのも難しい。理由不明瞭で却下されるだろうし、それ以前に、お父様に申請自体を握りつぶされるだろう。

この屋敷を抜け出せたとしても、どこに潜む？　こちら一体はお父様の天下だ。うまく抜け出せたとしても、誰かが私をみつけた瞬間にお父様に私を差し出し、そうして強請るはずだ。もっといい生活を、と。

小娘1人ごときの命より、自分や家族の生活の方が大事だろう。そんなことはわかつている。屋敷内にも、私のことを少なからずよく思っていない者がいっぱい。それに加えて使用人も大勢いる。向こうだって馬鹿じゃない。縁談が表ざたになった以上、まさに蟻すらも逃げれないほどの包囲網を貼って私の逃亡を警戒しているはず。

いや、それでも夜中はそこまで厳戒態勢をとっているというわけではない。これをなんとか突破口にできないものか——。

いくら考えたっていい解決法なんて浮かんでこなかった。大分時

間が経つただろうし、今日はもう諦めて部屋に戻ることにする。

礼拝堂の扉をゆっくりと押し開き、外へと出る。さくさく、と土を踏みしめる小さな音をたてながら屋敷へと近づいた。屋敷の扉は男3人でようやく開くことのできるほど重いもの。だから、夜中に外へ出るときはいつもキッチンの裏口を使っている。

薄く裏口のドアを開き、誰もいないことを確認してからさつと中へと忍び込む。ここが自分の家であることは間違いないけれど、気分は泥棒だ。外へ出たときと同様に靴を脱ぎ、ゆっくりと敷物の感触を楽しみながら進む。

そして誰にも気付かれずに、エントランスではなく屋敷の両端に設置されていて主に使用人が使う小さな階段の踊り場にたどり着いたときだった。

「……？ なにかしら、この明かり」

踊り場は大体正方形をしていて、一辺が1階と繋がっており、その右手側に階段がある。しかし階段の正反対、左手側の壁から一直線にチョークで線を引いたかのようにひかる一筋の明かりがこぼれていた。

好奇心を刺激され、ゆっくりと明かりをこぼす壁へと近寄る。とりあえず触つてみると、ゆっくりと明かりは増していく。どうやらこの壁は回転するらしい。90度ほど回したところで、動く壁は周りの壁と垂直になり、その両側からは大人が1人やつと通れるほどの光が溢れていた。これならば、私1人くらいは楽に入ることができる。

ここが誰かの秘密の場所だということは明らかだった。なにかに取り付かれたかのように、私はゆっくりと、その光の中へと足を進める。ここがもしお父様の秘密の場所であれば、なにか弱みとなるものがみつかるかもしれない。

そして、この屋敷を建てたのはお父様だ。ここがお父様の秘密の場所である可能性は、とても高い。

ここは屋敷内とは違って床が石そのままになっている。靴を脱い

でいてよかったと思いながら、前方を窺い、進んでいく。廊下状になっているこの空間の両側の壁、私の目元あたりに等間隔で明かりがつけられていた。この明かりが壁の隙間から漏れたのだ。

ロウソクはいくらかも溶けていないようだから、明かりがつけられてそう時間は経っていない。こんな時間に屋敷内を出歩く者なんていやしいから、今まで誰にも気付かれなかったんだろう。

入り口である壁からそう進まないうちに、前方に下りの螺旋階段がみえた。少しだけ胸騒ぎがしたけれど、お父様の弱みをみつけることができるかもしれないという誘惑に負け、ゆっくりと階段を降り始めた。

どれくらい降りたのかわからない。数秒、それとも数分か。いくらなんでもこのままでは目が回ってしまう。ここを探索するのは明日にして、今日はもう諦めようかと思った矢先、パシン、という小さな音が響いた気がした。

息を潜めて耳を澄ませる。確かに、一定のリズムでなにか音がしている。なんだろう、とこれは純粹な好奇心。行かなければよかったと思う。けれど、行かなければならなかった、とも思った。

やつのことで踊り場までたどり着く。その左手からは大きく明かりがこぼれていた。なにか部屋があるんだろうか。音のこもり具合から、かなりの広さだと思う。先ほどから続いていた音は、階段を降りるにつれて大きくなっていた。

バシッバシッと何かを叩くような鈍い音だ。聞いているこちらが思わず身を竦めてしまうほど大きく鳴り響いている。それと、その音に消されるほどの、これは……うめき声？

とてつもなく嫌な予感がしたけれど、ここまできた以上、知らないふりはできなかった。階段の最後の一段を降り、開口部に身を寄せてそろりと中を覗き込む。

そこは大きな大きな空間で、2つに区分けされていた。向かって右側は床から天井までを格子で覆われており、何人もの人が閉じ込

められているようだ。

そうして、左側。何人もの人が半裸で転がっていて、皮膚のいたるところにみえる紅い筋が痛々しい。傍には顔を隠すためか、仮面をつけた人間が立っており、縄、鞭などを持っている。あれで転がる人々を打ちつけたのだ。こうしてみている間にもまた1人、背を打たれて転がりまわる。一瞬こちらに向けた顔の額にはくつきりと赤黒い烙印がみてとれた。

背筋に悪寒が走る。ここではなにが行われているのか。私はほとんど無意識のうちに空間全体を見回していた。そして、ある一点に差し掛かるとそのまま視線は釘付けになった。

昼間の穏健・凡庸とした雰囲気からは想像がつかないほど陰険で、恍惚とした笑みを浮かべた実の父親が、そこに立っていたのだ。

03・接触

一体あの後どうやって部屋まで戻ってきたのだろうか。

無残な光景よりも自分の父親が人間以下だということにショックを受け、そこから先、見つけ出した隠し扉から自分の部屋へと戻ってきた記憶がない。そこだけばかりと抜け落ちているかのように真っ白だった。

もちろん1階に隠し扉があつて、奥へ奥へと進んでいくとあの禍々しい空間があつたということは忘れようにも忘れられない。そこからどうやって戻ってきたかがわからないのだ。別に思い出したいでもないけれど、誰かに見られてやしないだろうか。それが気がかりだ。

我に返つたらいつのまにかベッドの上で何枚ものシーツにくるまつて震えていた。窓からはさんさんとした光が差し込んでいて、寒さからくる震えではないことなんてわかりきつたことだ。

昨日のアレが実は夢だったのではないか、そんな空想さえ抱けるようなごく普通の朝が巡ってきていた。

いつものあの世間から見れば鷹揚に振舞っている父。つい昨日までは、私もその評価を疑っていなかった。

鷹揚で、愚鈍で、権力さえなければ母を捨てたも同様な男なんて絶対に許しはしないと、そんなことすら思えるほどだった。けれど、愚鈍であつたのは、自分。

目の前で多くの「使用人」が殴られ蹴られているのに怒るでもなく、その光景を見て悦楽に浸っていたあの男を、今の今まで私は人間だと疑っていなかったのだ。

いくら彼らの先祖が人間に害をなしていたとはいえ、“今”を生きる彼らにはなんの罪もない。それなのに、自らの悦楽に浸るために彼らを虐げている。あの光景を見て、一番衝撃だったのはそのことだ。

夜中眠れずに混乱だつてとけなかったほどののだ。きっと私には、お父様のことを嫌つてはいても心のどこかでまだ信じたいとか、嫌いになりきれない部分というものがあつたのだと思う。

今頃気付いて本当に情けないというのか、あの光景を見てはじめて気付いたことが悲しいというのか、自分の今の気持ちをうまく表現しろといわれてもそれは無理だとしかしいようがなかった。

だからといっていつまでもベッドで震えていたってなんにもなりはしない。

もし私の姿が誰かに見られでもしていたら、私に対してなんらかの措置がとられるのは明らかだ。今までは表立つて何もされてこなかったけれど、今後はどうされるかわからないのだ。

お父様が私に対してなにか手を出してくる前に、なんとかできないだろうか。そうだ、こんなところで震えていたってなんにもなりはしないのだ。

ずっと座っていたから石みたいに固まっている身体を叱咤し、ゆっくりと動き始める。今までと比にならないほどなんとかしなければならぬ、という気持ちが湧き上がってくる。

そうだ、今までは世間体が絡まっていたから手を出さなかったのかもしれないけれど、もうなにをしかされるかわからない。見られていなかったとしても、なにかのきっかけでばれてしまう前に対策は立てるべきだ。

頭が回転し始めると、あの時は気付けなかったことにも気付けるようになってくる。

仮面を被っていた男たち、あれは多分そこそこでも地位のある者。万が一にでも顔を見られては問題だから、といったところか。実際私も顔を見ていない以上どうすることもできないのだから。

お父様は仮面をしていなかったし、この屋敷で行われていたのだから、もちろんあの狂宴はお父様の主催であるはず。罪のない者が暴行を加えられているところを見て悦楽に走る姿は醜悪。サディステイックな趣味があるとは思わなかった。とすると、昼間の愚鈍さ

は本性を隠すための演技だろう。

なにをされていたのか詳細には覚えていないけれど、殴られ蹴られていた者たちはかなりの人数いたはずだ。10人以上はいた。加害者もペアだったから、つまりは仮面を被った男たちも10人以上いたはず。

暗くてよく見えなかったけれど、格子の中にも被害者加害者共にいたのだろう。どうやってあれだけの人数を地下に押し込め、さらに生活の世話までしているのだろうか。

暴行を加えることで悦楽に浸っているのだから、餓死させるようなことはしないと思う。折角の贅なんだから、そんなことで殺すほど無駄な真似はしないだろうし。一応何人かは世話役が必要だと思っけれど、あのお父様が屋敷内で働く使用人の中にその者たちを紛れ込ませると思わない。とすれば世話役を監禁もしくは軟禁する部屋もどこかに存在するのだろうか。

今思えばこれほどまでに世間体を気にしていたのは、こうした本性や狂宴について何も知らない外部の人間にばらさないようにするためかもしれない。

マーシャ様やラグドは知っているのだろうか。知っているとすれば3人とも似通った性癖の持ち主だということになるだろうし、3人とも地位をお持ちだから全体的にかなり大規模な集団であると考えられる。

考えたくもないけれど、自分を守るために、この考えは必要なのかもしれない。

自分を守るため、それは確かにそうだ。自分が死んでしまえばなんにもならない。お母様の遺志を継ぐためには、生きていることが不可欠だ。

今まで私はきつと、お母様の遺志を受け継ぐ、という大義名分のもと全てを考え、行動にうつしてきた。けれどこれは突き詰めて考えると単なる言い訳に過ぎない。

今、お父様とかお母様とかそういうものは全部関係なくて、こ

の状況を、なんの罪もない彼らを、なんとか助け出したい。私は初めて、自然にそう思った。

「もうそろそろ……大丈夫、かしら」

時計の針は深夜を過ぎ、そろそろ１時に差しかかるかというところだ。昨日部屋を抜け出したのと同じ時間帯だ。

もう一度時間を確認し、ベッドから這い出る。自分の部屋ではないとは思っけれど、用心するに越したことはない。

いつもと寸分たがわない態度で１日を過ごした。お父様もマーシヤ様もラグドもいつもと変わらず１日を過ごしていたようだし、あの感じだと多分私のことは気付いていないようだ。

確かに今日初めに会った時は緊張したけれど、気付いていないと知ると寧ろ安心して生活することができた。

普段どおりに振舞いながらずっと考えていたのだけれど、私はあの場でなにが行われていたかを具体的には覚えていない。もしアレをきっかけにしてお父様以下狂宴に関わってきた全ての人物の行いを暴こうとするのであれば、狂宴の詳細を知ることが大切なのだ。

できればあんな所には２度と行きたくないけれど、なんとかしようと思うのであればどうしても行く必要がある。

彼らを助け出すために、後１回はなにが行われているのか、その確認がしたい。そのためには彼らにもう一度殴られる。こんな考えは最低だとは思えない。けれど、私にはこんな方法しか思い浮かばなかった。

私室のドアを開けて、今夜も昼間と違って誰かが見張っていないことを確認してから動き始める。昨日と違って直接屋敷内を通って隠し扉まで行った。

動きやすいパンツ姿で上着も全て黒を選んであるから、この姿で用心して行動すれば誰かに見付かる確率は下がるのではないかと思

う。充分に注意して動いているから、これで誰かに見付かってしまえばそれはもう仕方のないことだ。

周囲に誰もいないことを3回確認してから壁を押して隠し部屋へと乗り込む。物珍しさに目を奪われることもなく、出来るだけ音を立てないように用心しながら、それでも出来るだけ早く螺旋階段を降りていった。

大体6階分くらいだろうか、それくらいの階段を降りてようやくと踊り場に辿り着いた。けれどなにかがおかしい。確かに左手からは大きく明かりが、昨日に比べるとどこか薄暗いけれど、こぼれていた。どこか違うのに、どこが違うのか解らない。

そんな違和感を覚えながらも忍び足で開口部に近づき、中を覗き込んだ。そこでは昨日のような狂宴が開かれて……いなかった。「あれ？」

無意識に声がでていたけれど、そんなこと、どうでもよかった。開口部の中の広い空間は確かに格子で区切られているけれど、そこに人影はない。

違和感の正体はこれだった。誰もいなくて、なにも行われていないから、なんの音もしないのだ。自分の息遣いだけが耳に届き、息を詰めると辺りの沈黙が耳に痛い。

もしかしたら、と考え直す。多分ここに悪魔を閉じ込めておくにしても限界があるだろうし、早々増やせないだろう。ということは毎晩毎晩狂宴を開いて彼らを痛めつけ、万が一にも殺してしまったらどうなる？ 結果的に狂宴を開く回数が減り、苦痛を感じるのは自分たち。

定期的に行ってはいらるだろうけれど、毎晩ではないようだった。そのことに全く考えも及ばなかった自分自身が情けなくも思う。

とはいえこれはいい機会なのかもしれない。

狂宴の実態を探ることは適わなかった。そして、仮面をつけた男たちが誰もいないことを知っても怖いものは怖い。けれど中に入ってみるには絶好の機会だ。もしかしたら、閉じ込められている彼ら

と接触できるかもしれない。

ごくりとつばを飲み込み、背中を汗が伝い落ちる感覚を受け入れながら、精一杯の注意を払って中へと足を進めた。時間をかけて音をたてないように、ゆつくりと進む。闇雲に真ん中に進むのもどうかと思ったから、壁伝いに格子の方へと行くことにした。

1歩、2歩、3歩、と足を進めるうちに、格子の中に誰かがいて、さらにこちらをじっと見ている。そんな気配を感じ取った。

明るい、とは言い難いけれどそれでも暗くはないし、さらにいえばこんなにも広い空間に黒い服装をした人間が突然現れたのだ。彼らが起きていたんだとすれば当たり前のことだけれど、驚いてしまつて一瞬足を止める。

格子の中に視線を向けると、誰かの視線とぶつかった。そんな気がした。

彼らに私がいることはもうばれている。だから今更どうこうしたつて無駄のような気がする。覚悟を決めてもう一度歩き出し、ようやく格子の前へ辿り着いた。ここまでこれば格子の中に何人閉じ込められているのかとか、視線だとか、そういったものがわかるようになる。

全員が同じような格好をし、同じような髪型をしているから、男女の別はちよつとわからない。けれど、何人か小さな子どもが混じっていることはわかった。きつと私よりも小さな子だ。

こんなにも小さな子までを犠牲にして、自分たちは快樂を得ている。改めてこの構図に、吐き気がするほどの嫌悪を感じた。

「……ごめんなさい」

たまらず呟いた言葉。人間ってなんだろう、悪魔ってなんだろう。悪魔が人間を虐げていたなんて、もう何百回も聞いていた。

だけどそれはいつ？ それは誰に対して？ 少なくとも自分たちの代ではなにもされていないはずだ。私が生まれてから、うっん、お母様が生まれてからだって、一度もそんなことなかった。

“大昔に虐げられた”。そんな大義名分の下、彼らはどれだけの

年月人間の慰み者にされてきたんだろう。今の彼らはなにもしていない。もちろん何も出来ないだけかもしれない。烙印という技術さえなかったら、彼らは人間にもつと害を及ぼしたのかもしれない。けれどそんなことは考えたってきりがなかった。

烙印を発明し、それだけで満足していればよかったのだ。今人間が悪魔に対してやっていることなんて、昔悪魔が人間に対してやっていたのと同じだ。そんなことにすら気付かないのだろうか。

こんなところで考え込んでいたって仕方がない。考えるのは部屋でもできるのだ、今は、今しか出来ないことをしよう。目の前に潜み、彼らが真つ向から浴びせてくる視線を受けながらそう思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3384a/>

[SilverRing]

2010年10月9日04時18分発行